

◆第2回企画展

乱世を駆けぬけた武將たち

—城館からみた馬淵川・北上川流域の中世史—



盛岡市遺跡の学び館

ごあいさつ

建武の新政以後、糠部に根をおろした南部氏は、南北朝の分裂後、南朝の要として活躍します。馬淵川流域には、一戸氏、三戸氏、四戸氏、七戸氏、八戸氏など、南部氏の支族が分かれ、九戸氏や久慈氏、浄法寺氏など、有力な国人領主も存在しました。一方北上川流域には、鎌倉時代以来の和賀氏、稗貫氏、足利氏一門の斯波氏、不來方を守る福士氏、岩手、志和郡東部の河村氏、遠野の阿曾沼氏、滴石の戸沢氏など、多くの領主たちが活躍し、時代を動かしておりました。南部氏のように、近世大名として発展し栄えたものもありましたが、多くの中世領主たちは、時代の移り変わりのなかで消え去る運命にありました。しかし、彼等の痕跡は、城館跡等の遺跡として、大地にしっかりと刻みこまれております。400年、500年以上もの時を越えて、発掘された城館跡は、過酷な乱世を生き抜いた武将たちの生き様を伝えております。今回の企画展は、中世城館の発掘調査成果を中心に、乱世の武将（領主）たちに光をあて、馬淵川、北上川流域の中世史を紐解きます。

平成17年7月

盛岡市遺跡の学び館

■ 盛岡市遺跡の学び館第2回企画展

会 期／平成17年7月1日(金)～同年8月21日(日)

会 場／盛岡市遺跡の学び館企画展示室

主 催／盛岡市遺跡の学び館

後 援／岩手考古学会、岩手史学会、岩手県文化財愛護協会、奥羽史談会、岩手の館研究会、岩手日報社、朝日新聞盛岡総局、読売新聞東京本社盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、時事通信社盛岡支局、共同通信社盛岡支局、河北新報社盛岡総局、日本経済新聞社盛岡支局、産経新聞盛岡支局、デーリー東北新聞社盛岡支社、盛岡タイムス社、NHK盛岡放送局、IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、岩手ケーブルテレビジョン、エフエム岩手、ラヂオ盛岡、月刊アキュート、マ・シェリ、情報紙游悠

■ 特別講演会

講 師／岩手大学教育学部教授 菅野文夫 氏

演 題／「乱世の武将たち—南部氏・斯波氏とその周辺—」

日 時／平成17年7月10日(日) 13時30分～15時30分

会 場／盛岡市遺跡の学び館 研修室

凡 例

- 1 本書は盛岡市遺跡の学び館第2回企画展「乱世を駆けぬけた武将たち—城館からみた馬淵川・北上川流域の中世史—」の展示図録である。
- 2 展示資料名及び遺跡・遺構名・年代等について、調査報告書の記載内容と、本図録の記載内容が異なる場合があるが、その場合は、本図録作成者である当館に責任がある。
- 3 本書の資料掲載順序は、展示の順序とは必ずしも一致しない。また、図録掲載資料のなかには、今回展示されていない資料も存在する。なお、巻末には展示資料一覧表を掲載した。
- 4 本書に掲載した写真のうち、提供者名の記載のないものは、当館撮影、所蔵の写真である。
- 5 企画展及び展示図録作成にあたり、次の機関・方々よりご指導・ご協力をいただいた。

岩手県教育委員会生涯学習文化課 岩手県立博物館、岩手県埋蔵文化財センター
八戸市博物館 南部町教育委員会 三戸町教育委員会 二戸市教育委員会
一戸町教育委員会 紫波町教育委員会 花巻市教育委員会 北上市教育委員会
北上市立中央図書館 東北大学日本史研究室 いろは写房
坂 川 進 永 井 治 野 田 尚 志
溜 浩二郎 中 川 重 紀 高 木 晃
女 鹿 潤 也 西 澤 宗 治 柴 田 知 二
中 村 明 央 酒 井 宗 孝 稲 野 彰 子
小田嶋 知 世 本 堂 寿 一 小 野 昭 夫
菅 野 文 夫 柳 原 敏 明 菅 原 久 美 子

目 次

ごあいさつ

凡例

I	鎌倉時代の領主	4
II	南北朝・室町の動乱と城館・領主	7
III	戦国乱世と城館・領主	19

I 鎌倉時代の領主

1. 源頼朝の奥入

平安時代末期の12世紀、奥羽の地のほとんどは平泉藤原氏のもとに統率されておりました。当時の奥羽と、その中心都市平泉は、豊富な産金や馬産、北方世界や大陸との交易等により、豊かに栄えておりました。一方、源氏は11世紀から奥羽への進出を目指していましたが、源頼朝は東国を基盤とした武家政権の確立のため、政権の中核にあった平家を滅ぼしました。さらに文治5年(1189)、全国の御家人に命令を下し、28万余の大軍で奥羽に侵攻します。この合戦で平泉藤原氏は滅び、頼朝は奥羽各地に御家人を配置し、鎌倉幕府の奥羽支配が始まります。

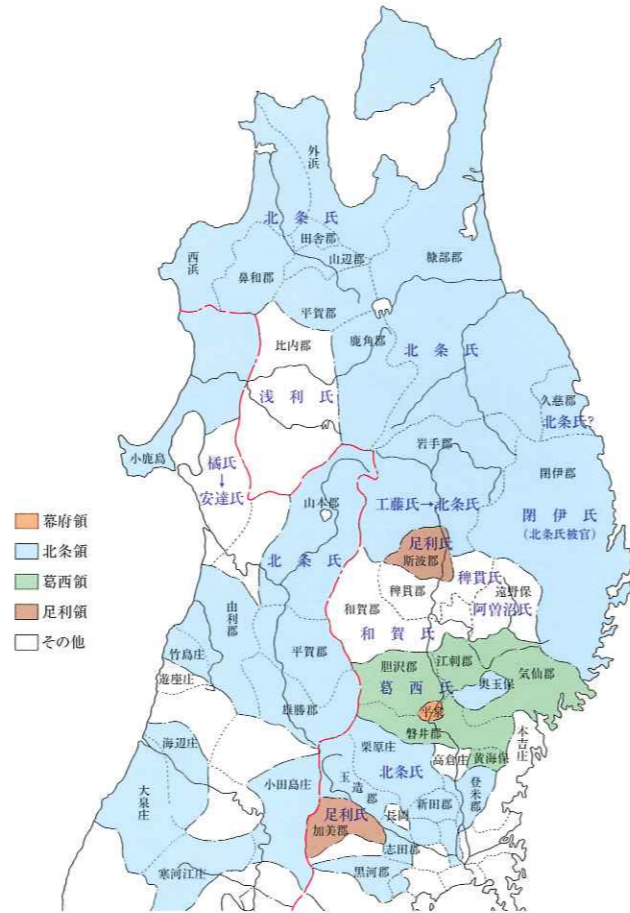
2. 幕府の北奥支配

頼朝は新たな支配制度として全国の国に守護と地頭をおきました。守護は国単位で配置され、地頭は荘園、あるいは郡ごとに置かれました。しかし広大な奥羽には守護は設置されず、武蔵国(東京都)の葛西清重を奥州総奉行に任じて、平泉を拠点に奥羽全域を統率させました。また各地の郡、庄、保などには関東に基盤をもつ御家人を地頭として配置するなど、奥羽は幕府による強力な支配体制が整えられました。まず、津軽、外ヶ浜、糠部郡、久慈郡にわたる広汎な地域は、鎌倉時代を通じて得宗領(北条家嫡流の所領)でした。ここには相模国(神奈川県)の曾我氏の三浦氏、伊豆(静岡県)の工藤氏、横溝氏などのほか、津軽の安藤氏など、得宗家の被官(家臣)たちが地頭代として入っていました。津軽安藤氏は安倍氏につながる土着の豪族です。

岩手郡には最初甲斐(山梨県)の工藤氏が入りましたが、後に北条氏に代わりました。斯波郡には幕府の有力御家人の足利氏が入りましたが、やがてここを名字の地として分家し、斯波氏を名乗ります。閉伊郡には閉伊氏、遠野保には下野国(栃木県)安蘇郡の阿曾沼氏、稗貫・和賀両郡には、武蔵国幡羅郡(埼玉県)の中条氏が入り、それぞれ稗貫・和賀を名のりました。江刺、気仙、胆沢、磐井の各郡は葛西氏の所領で、鎌倉時代に磐井郡から分立した黄海、興田、奥玉の三つの保のうち、奥玉保は二階堂氏の所領でした。この地も鎌倉時代の末期には北条氏の所領となり、また閉伊氏も北条氏の被官となるなど、幕府政権の北条氏一族が、鎌倉時代後期までに北奥の所領化を進めた様子がわかります。

御家人たちには、それぞれの本領があるほか、鎌倉への出仕もあり、最初のころ、奥州の領地には地頭代を派遣し、自身は本領と奥州の所領を往復するような体制をとっていたようです。実際に奥州に土着するようになるのは、多くの場合鎌倉後期頃からと考えられます。奥羽の現地には、関東から代官が派遣される場合もありましたが、津軽安藤氏や気仙郡の金氏など、旧来の地元豪族が登用される場合もありました。正治2年

(1200)幕府は、「奥羽両国は藤原秀衡・泰衡の先例に倣って統治する」よう命じており、現地の事情に明るい地元豪族の登用は、ごく自然なことでした。



鎌倉時代後期の地頭



嘉暦三年(1328)の板碑と碑文
(二戸市教育委員会提供)

武蔵型の板碑と呼ばれるもので、関東武士の来住を示すものか?

(阿弥陀如来(阿シユク如来)
キリク・ウーン
奉為釈迦遺法弟子忍地沙弥、
嘉暦(戊辰)第三年初九日(孝子/敬白)

3. 鎌倉時代の居館

北奥には平安時代の中頃(10世紀)から、村の一部や中心部などを、堀で囲んだ遺跡が存在します。いわゆる防衛性集落と呼ばれるもので、主に盛岡・秋田以北の地域から北海道にかけて分布します。防衛性集落は11世紀の安倍氏、清原氏の段階には構造的に大きく発達し、いわゆる在地豪族の城柵となります。12世紀の平泉藤原氏の頃には、径300mほどの範囲を、自然地形に沿って堀を廻らせた居館が造られます。平泉柳之御所遺跡のほか、紫波町比爪館跡、盛岡市稲荷町遺跡などで確認されています。内部には柱列や板壁で区画された館主の屋敷が存在し、平泉の柳之御所遺跡(平泉館)では、園池を伴います。自然地形に合わせた形の居館は北奥の伝統的な形態で、後の中世の城館や居館などにもその伝統は引き継がれます。一方、鎌倉時代に関東武士が多数この地方に入り、北奥の伝統とは異なる形の方形居館も造られました。

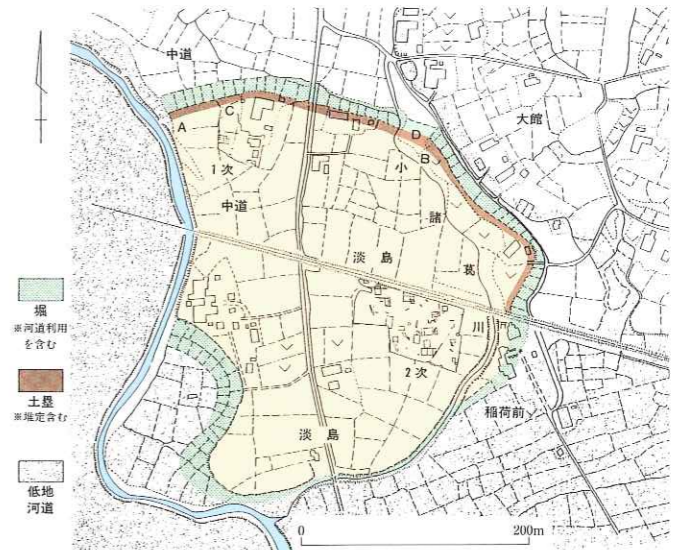
◇ 諏訪前遺跡(岩手県二戸市)

二戸駅の南西側にある居館跡です。東西が100m~120m、南北90m~140mの方形居館です。堀の規模は幅5m内外、深さは1.3m内外で、ひじょうに丁寧に造られています。堀は新旧の2時期あり、古い段階の居館と堀は、新しい堀よりもやや小さな規模であったようです。新しい南側の堀中央には橋が架けられ、堀に沿って堀跡とみられる柱穴の列があります。内部の建物跡などはまだ未調査ですが、堀の内外からは国産の山茶碗(1~3)や常滑の壺や甕、中国産の青磁(4~6)、白磁などの高級な陶磁器が出土しています。堀の中からは陶磁器類とともに馬の歯や骨も出土しています。居館の周囲からは溝で区画された屋敷跡や建物跡、居館の堀に水を引いたと思われる溝もあり、馬産地糠部を抑えた、北条氏地頭代の居館と周辺の屋敷群と推定されています。

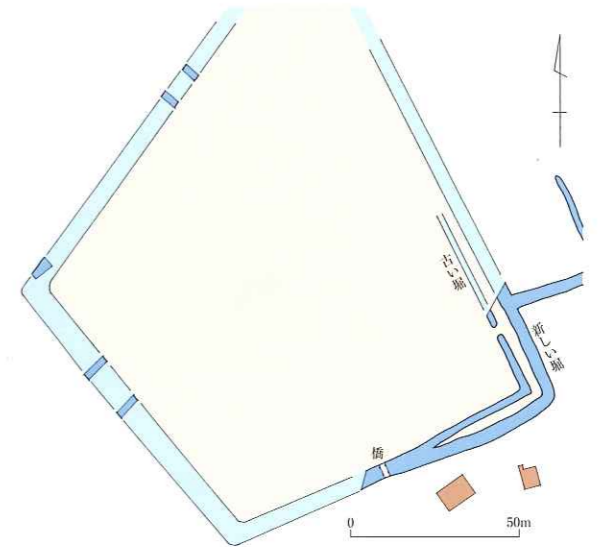
なお、前ページの板碑は、かつて居館跡の南西側付近に存在し、現在は居館跡の東側に移設されています。



諏訪前遺跡の堀(二戸市教育委員会提供)



稲荷町遺跡(盛岡市)



諏訪前遺跡(二戸市)



諏訪前遺跡出土陶磁器

II 南北朝・室町の動乱と城館・領主

1. 南北朝の内乱

◇ 建武の新政と奥羽

元弘3年(1333)鎌倉幕府の滅亡後、後醍醐天皇は公家を中心とした政権をたてました。翌年年号を建武と改めます。陸奥の国司には、北畠親房の嫡男顕家を起用し、陸奥国府(宮城県仙台市泉区)に派遣しました。このころ北奥の津軽では、北条氏地頭代の曾我氏や工藤氏などが官方と旧幕府方に分裂して騒乱状態となっておりました。幕府方の大光寺城(平賀町)、石川城(弘前市)、持寄城(相馬村)などで激しい合戦が行われましたが、建武元年(1334)に一旦は鎮圧されました。北畠顕家は陸奥北部での支配の安定と戦後処理のため、津軽には工藤貞行を、糠部には南部師行(八戸南部氏)を派遣します。

後醍醐天皇の起こした建武政権は、それまでの先例を無視して性急な改革を推し進めたため、大きな混乱を巻き起こしました。鎌倉幕府討伐に尽力した武士達は、十分な恩賞なども得られず、不満を募らせてゆきました。こうしたなかで、足利氏への武士達の期待が高まってゆきました。建武2年(1335)にはついに足利尊氏が反して北朝を立てたため、建武政権はわずか2年で破綻しました。後醍醐天皇は吉野に逃れます。

南部師行は伊達氏、葛西氏、河村氏、滴石氏などとともに、終始陸奥の南朝勢力の要として行動しました。師行は延元3年(1338)河内国石津(大阪府)で、北畠顕家と共に戦死しましたが、南部氏はこのあとも政長、信政、信光、政光と南朝方を貫きました。斯波氏は足利家一門であり、稗貫氏も早くから足利方として行動しており、稗貫郡内には北朝年号の石碑が残っております。

和賀氏一族は当初官方として動いておりましたが、やがて宗家と鬼柳氏は足利方に、須々孫氏は南朝(宮)方に分かれて争います。須々孫氏の須々孫城や、鬼柳氏が須々孫城攻めに築いた岩崎橋が戦場となっております。

◇ 三迫合戦

興国元年(1340)北畠顕信(顕家の弟)が奥州に入り、伊達領の宇津峰城(郡山市・須賀川市)に入ります。翌興国2年(暦4年:1341)には、南部氏、河村氏、滴石氏、葛西氏等と共に北から陸奥国府に迫りました。奥州総大将の石塔義房は、栗原郡三迫(栗駒町・金成町)に兵をあつめ、南朝勢を阻止します。合戦はこの年と翌年(興国2年)の二度にわたり、特に興国二年の合戦は一ヶ月以上に及ぶ戦でしたが、足利方は和賀氏や岡本氏などの援軍によって辛くも勝利しました。

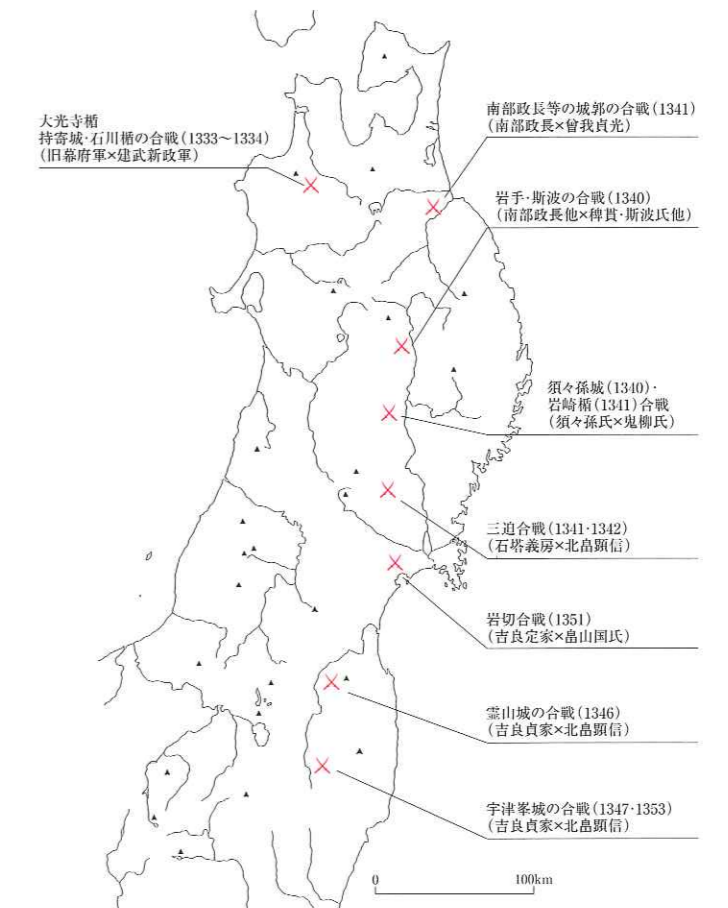
また関東では、北畠親房の常陸(茨城県)の関城、大宝城があいついで落城し、南朝方の勢力は大きく後退します。

◇ 観応の擾乱・岩切合戦とその後

観応元年(1350)足利氏は尊氏派と直義派に分かれて対立しました。いわゆる観応の擾乱といわれる争いです。翌年尊氏と高師直は直義に敗れますが、直義は有力守護の離反にあい逃亡。文和元年(正平7年:1352)尊氏が勝利します。

この内紛は奥羽にも直接波及し、奥州管領の畠山国氏と吉良貞家が争います。観応2年(正平6年:1351)1月に吉良貞家はが挙兵し、2月には畠山国氏の拠る留守氏の居城岩切城(仙台市泉区他)を攻めて国氏を自害させました。北畠顕信は足利氏の内紛に乗じて軍をおこし、一時は陸奥国府を奪還しますが、まもなく体勢を立て直した吉良貞家の反撃に敗れます。顕信は宇津峰城(郡山市・須賀川市)に移り抵抗しますが、正平8年(文和2年:1353)5月、吉良貞家の軍に攻められ落城。顕信は出羽に逃れます。このあと、奥羽において、南朝勢力の組織的な軍事行動はほとんど見られなくなります。

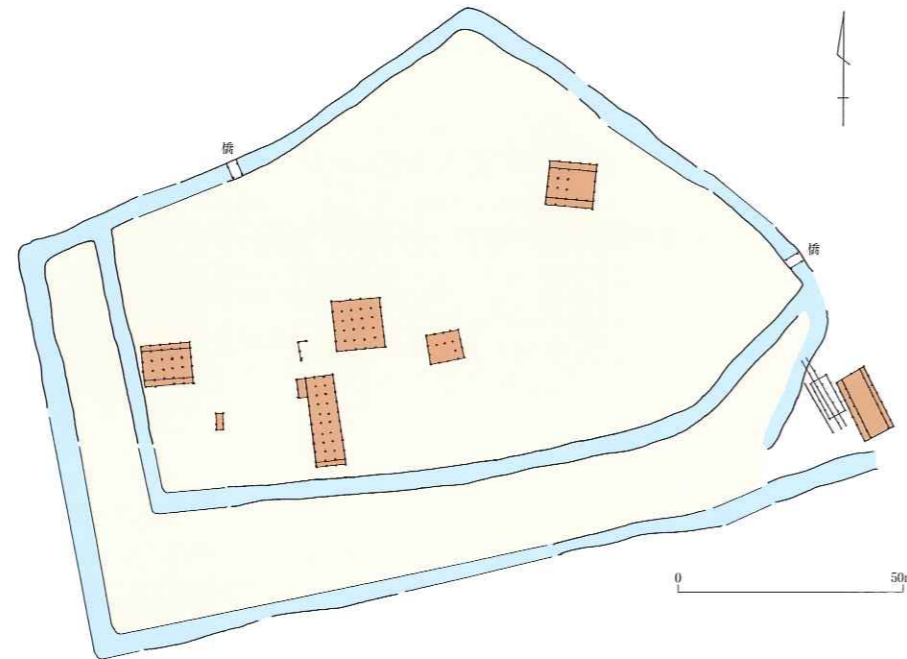
元中9年(明德3:1392)、南北朝の合一となりますが、この年、南部政光は八戸の根城に入ります(八戸家伝記)。これ以後南部氏は糠部に定着し、北奥の領主のなかで台頭していくことになります。



奥羽の南北朝内乱

◇ 台太郎遺跡(岩手県盛岡市)

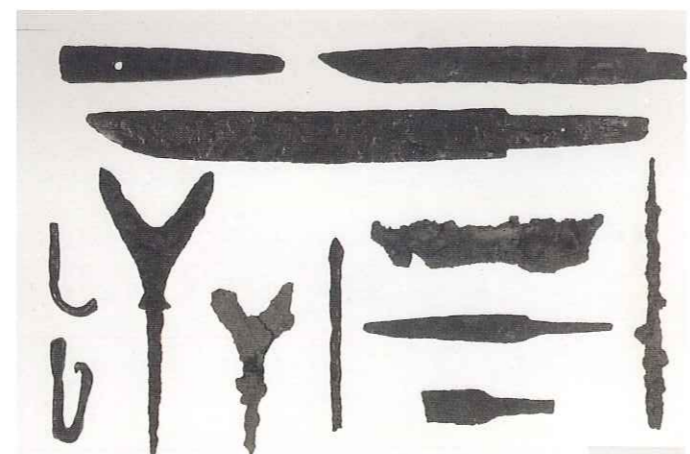
盛岡市向中野に発見された居館の跡で、東西160m、南北110mの範囲を不整形五角形に堀を廻らします。堀の規模は幅4m~6m、深さは1.5m内外で、新旧2時期あり、古い時期の居館は一回り小さな居館だったようです。直線的な堀ですが、居館の形態が方形とならず、周辺の地形・地割りに合わせた平面形で造られています。堀の内部からは大形の掘立柱建物跡が4棟存在し、小形の掘立柱建物跡も数棟存在します。堀の中からは国産の瓷器系の甕や拵鉢、瀬戸の灰釉皿、中国産の青磁盤、鎬蓮弁文の青磁碗が出土しました。居館の規模や出土陶磁器から、この地方を治めた在地領主の居館と考えられます。



台太郎遺跡

◇ 磯鶏館山遺跡F地区(岩手県宮古市)

宮古市の磯鶏館山遺跡は15世紀の山城跡ですが、この山の南西側山裾のF地区から、鎌倉時代の屋敷跡が発見されています。山を背にして、長屋風の掘立柱建物跡の前面に畑の畝跡が広がります。建物跡の内部には火を焚いた炉の跡も確認されています。建物跡と周囲からは13世紀の常滑や瓷器系の陶器破片とともに、小刀や鉄鏃、釣針などが出土しています。江戸時代までは館山の麓まで海が入り込んでいたと伝えられております。畑作や漁業を営みながら武技を練る、地方武士の姿が浮かびあがります。



磯鶏館山遺跡出土鉄製品(宮古市教育委員会提供)



台太郎遺跡出土陶磁器・土器

III 戦国乱世の城館・領主

1. 北奥の戦国時代

応仁・文明の乱（1467～1477）以後、室町幕府はしだいに力を弱めます。これは諸国においても同様で、守護に代わり、守護代や有力武士たちが、幕府の統制を離れて活動するようになります。奥羽では応仁・文明の乱と同じ頃、葛西領内の有力武士たちの紛争が拡大し、大崎氏家臣団の反乱を誘発する事態となりました。この戦乱は長期化し、すでに大崎氏の支配力は、直臣の統制もままならないほど、翳りを見せはじめていました。

大永2年（1522）伊達種宗が陸奥守護職に任じられました。ここに大崎氏を頂点とする奥州探題制は完全に崩壊し、力のあるものが他を押しつけて台頭する、戦国の動乱時代にはいりました。

天文8年（1538）、糠部の南部彦三郎は、足利義晴より一字を賜り、南部晴政と改めました。このころから三戸南部氏が飛躍的に台頭しました。晴政は聖寿寺館（南部町）から三戸城（三戸町）に城を移し、九戸氏も同じ頃に、大名館（九戸村）から九戸城（二戸市）に居城を移転しました。どちらの城も旧城とは比較にならない規模と堅固さを誇り、この時期における両勢力の急成長を物語っております。糠部では三戸南部氏と九戸氏が並び立つ状況が生まれましたが、このことは各領主間に微妙な影を落とします。

一方北上川中流域では、志和郡の斯波氏は遠野の阿曾沼氏や近郷の領主、それに九戸氏とも縁戚関係を結び、岩手郡滴石・猪去に進出するなど、室町以来の家格と求心性を保持しておりました。志和郡中央にある高水寺城はその象徴といえます。九戸氏は八戸南部氏・久慈氏などのほか、斯波氏や不來方の福士氏とも縁戚関係を持ち、三戸南部氏に拮抗する強大な勢力へと

成長しました。16世紀中葉ごろの拠点城館の大規模化は、こうした有力国人層の戦国大名化の動きと一致するものです。

天正10年（1582）1月、南部晴政、晴継が相次いで死去すると、晴政父子や九戸政実と対立関係にあった田子信直が三戸南部家を相続します。この頃から南部信直と九戸政実の対立は激化しました。

天正15年（1587）豊臣秀吉は関東・奥羽総無事令を發布し、大名や領主どうしの私戦を禁止しました。この年、南部信直は、前田利家と起請文と交換し、豊臣秀吉に接近。自身が糠部の領主であることを認められております。豊臣政権を後ろ楯とした南部信直は、翌天正16年（1588）、室町以来の名門斯波詮直（斯波御所）を滅亡させました。

天正18年（1590）小田原攻めに参陣した南部信直は、奥羽仕置で南部七郡を本領として安堵されました。一方、これに従わなかった葛西・大崎・和賀・稗貫などの諸氏は、領地を全て没収されました。それぞれの領地は一旦豊臣政権に納められましたが、旧領主たちがこれに一斉に反発し、各地に反乱が起きました。糠部においても九戸政実を中心に反信直勢力が集まり、各地で信直方と交戦。「糠部中錯乱」、「20里30里の間において、毎日懸合の体に候」という未曾有の混乱状態となりました。この対応に苦慮した信直は、豊臣秀吉に助力を要請します。翌天正19年（1591）豊臣軍が出動し、大崎・葛西の乱、九戸の乱は鎮圧されました。九戸城は合戦直後に豊臣軍により改修され、南部信直の本城となります。しかし信直は、浅野長吉より奨められていた、不來方（盛岡）への居城移転を決意。慶長2年（1597）3月、嫡子利直に命じて盛岡城築城に着手します。

◆ 藪III遺跡

盛岡市紫の御所湖畔にある遺跡で、現在は紫大橋南側袂にあたります。御所ダム建設以前は、雫石川南岸の台地上にある屋敷跡でした。この南側は近世の沢内街道が通じ、南側は湯ノ館山の裾に続いております。屋敷には東側から入る通路跡が確認されていて、西側斜面部には区画溝がめぐります。中央西よりの地点には、廂や縁のある屋敷の主屋があり、内部が2～3室に部屋割りされています。周囲にも縁のつく建物があり、主屋北側には長屋風の建物があります。ほかに納屋か作業場と推定される竪穴建物も4棟存在します。主屋北西側には方形の周溝があり、屋敷神などが存在した場所でしょうか。

屋敷跡から出土した陶磁器には灰釉折縁深皿（1・2）、灰釉罍皿（3）、灰釉瓶子（6）中国天目茶碗（4）、白磁皿（5）、瓷器系播鉢（7）が出土し、15世紀の製品が中心です。

藪III遺跡湯ノ館に関する屋敷跡と推定され、室町時代の領主屋敷として貴重な調査例です。



藪III遺跡出土陶磁器



室町時代の屋敷 藪III遺跡



高水寺城跡（紫波町教育委員会提供）

◆ 九戸城跡（国指定史跡）

二戸市福岡にある大規模な城館で、九戸氏が二戸に進出して築いた居城でした。馬淵川、白鳥川、猫淵川に三方を囲まれた要害で、南側には深い堀がめぐらされており。本丸、二の丸、石澤館（外館）、若狭館、三の丸、松の丸からなる大規模な城です。それぞれの曲輪は空堀で隔てられています。二の丸の裏手にある石澤館や若狭館は、その地形から九戸氏時代の姿をそのまま伝えているものとされています。

本丸は九戸の乱直後に豊臣軍の手によって石垣や櫓台、食違いの虎口を備えたプランに大改修されています。この整地層の下には九戸城時代の本丸が埋もれていますが、当時の陶磁器のほか、多数の埴塼や火縄銃の弾丸の鋳型が出土しています。埴塼のなかには陶器の皿をそのまま転用したのがあり、弾丸鋳型は一度の流し込みで多くの弾丸が作れるように工夫されています。ともにあわただしい籠城の準備の様子がかがえます。二の丸や松の丸も南部氏の時代に築き直され、本丸の南や二の丸の地下には、埋められた九戸城時代の空堀が確認されています。この空堀のなかからは、女性を含む7体の首のない人骨が発見されています。この堀の東側、二の丸の東部からは多くの竪穴建物が発見され、当時の陶磁器類とともに、石臼や埴塼、革小札に漆を塗り金箔をおしたものがみつかりました。城内の



九戸城跡全景（二戸市教育委員会提供）

職人集団の存在とともに、きらびやかな甲冑に身をかためた、九戸勢の様子がかがえます。

九戸城跡からの出土陶磁器は中国の青磁碗や皿類、染付皿、瀬戸・美濃の天目茶碗、灰釉皿、唐津の大皿、美濃の鉄絵皿があります。出土遺物から九戸氏の在城は概ね16世紀代であり、南部氏の福岡城のあった、17世紀前葉ごろまでの製品が認められます。



九戸城本丸南側の門跡（福岡城期）



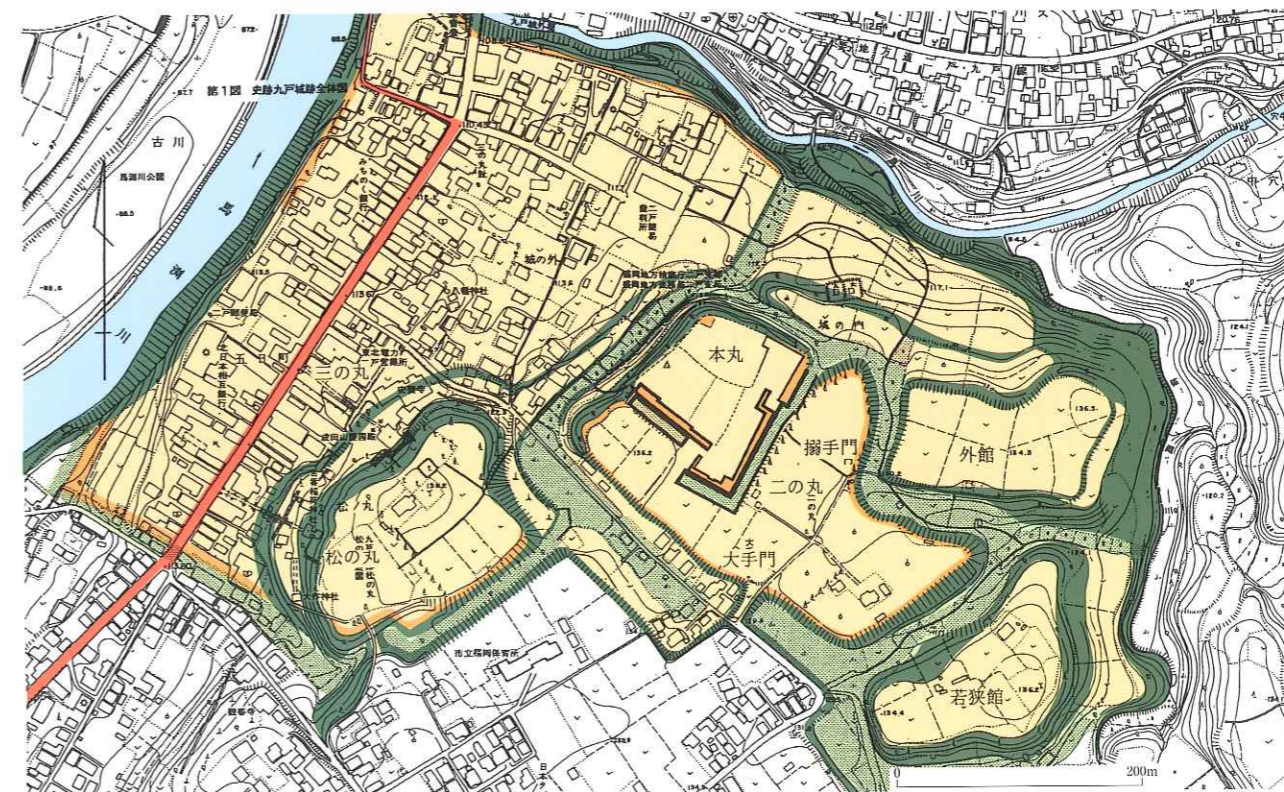
九戸城堀跡（二の丸北東側）



陶磁器



弾丸鋳型と埴塼



九戸城跡（福岡城跡）

◆ 九戸落城の悲劇

天正19年9月2日、九戸政実、櫛引清長、七戸家国を中心に、城兵や民衆およそ5千人が立てこもるこの城は、約6万の豊臣軍に囲まれ、攻撃を受けました。九戸城の城兵の士気は高く、兵力では勝る豊臣軍も、城の険しい地形に阻まれ、簡単には落城しなかったのです。城兵は大軍を相手によく戦いましたが、しだいに疲労の色が濃くなりました。豊臣軍も食糧が乏しくなり、軍監の浅野長吉（長政）は、戦いの長期化を避けるため、九戸村の長興寺住職を使者に立て、九戸政実に降服を勧告しました。9月4日、九戸政実は、城内に残る人々の助命を条件に、豊臣軍の降服勧告を受け入れて開城しました。

しかしこれは豊臣軍の謀略でした。政実主従が投降した直後、城兵は、武装を解かれて本丸から退去させられました。そして老人や女性、子供たちとともに二の丸に閉じ込められ、まわりから火をかけられたのです。火は強い風に

あおられて櫓や建物に忽ち燃えひろがりました。あわてて火から逃れようとするものは豊臣軍の兵に容赦なく切り殺され、敵兵の刃から逃げるものは炎や煙にまかれて命を落としたのです。このありさまを伝える「南部根源記」（南部叢書第2冊）には、

「燃え盛る炎は天を焦がし、老若男女の喚き叫ぶ声は空にまで響き渡った。その容赦ない殺戮は、罪人の処刑や牛馬の殺生よりも惨たらしく、目もあてられない有様であった。」と記されています。

室町・戦国時代の城館は、江戸時代の盛岡城、弘前城のような城とは異なり、武士のほか、鍛冶職人、漆職人、木工職人など、様々な職種の人々が日常的に城に関わり、成り立っていました。そのため、実際に城攻めとなると、命を落とすのは武士だけではなく、非戦闘員の民衆までもが犠牲となることも、決して少なくはありませんでした。